



(磐)田

調査の結果、遺跡は弥生

## 静岡・山の神遺跡

1 所在地 静岡県浜松市和田町

2 調査期間 一九八七年(昭63)八月～一九八八年八月

3 発掘機関 浜松市教育委員会・財浜松市文化協会

4 調査担当者 佐藤由紀男・森田香司

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山の神遺跡は、浜松市街地の東約4kmに位置し、天竜川の形成する沖積平野上に立地して、東西を天竜川の支流である安間川・馬込川に囲まれている。

発掘調査は、総合体育館建設とともになされたものであり、

調査面積は約一七〇〇〇m<sup>2</sup>で、遺跡内の南側に東西一〇〇m、南北一七〇mの方形の発掘区を設けて調査を行った。

時代後期と平安末～鎌倉時代の二つの時期に集中していることが明らかとなつた。木簡と関連するのは後者であり、当時は環濠集落の景観を示していた。遺跡周辺には、伊勢神宮の内宮を領家とする蒲御厨が立荘されており、蒲氏を中心として、荘園の開発が進められていた。したがつて環濠の役割は、敵から身を守る防禦というよりも、天竜川の氾濫から田畠を守り、開発の単位を区画する施設となると考へられる。その区画は一辺約100m、つまり一町を単位として掘られており、その中に数軒の掘立柱建物・井戸・区画溝、そして田畠が作られていた。また遺物の年代によって、北側から開発が始まつたことも推測される。

木簡は井戸SE一〇とSE二二から、各一点出土している。SE一〇は曲物二段を井筒とする径一・九mの円形の井戸であり、深さは検出面より一mで海拔三・五mである。掘形はほぼ円筒状になっている。木簡は曲物の一段目と二段目の間で、北西の位置に差し込まれていた。SE二二も曲物二段を井筒とする径一・七mの円形の井戸で、深さも検出面より一m、海拔三・五mとほぼ同規模の井戸である。木簡は曲物の周りに差し込まれた五、六枚の縦板の内一枚であり、曲物から見て北東の位置に差し込まれていた。木簡の年代は共伴遺物がないため不明であるが、遺構のあり方からみて、およそ平安末期から鎌倉時代(一二～一三世紀)と考へられる。

木簡以外にも井戸枠・曲物等の木製品や山茶椀・灰釉陶器・土師

器等の土器類が出土している。山茶椀のうち十数点には墨書が見られ、当時のこの地域の地名となる「長田」の他にも「芳」「東」「中」「上」等がある。また家畜の使用を暗示するような牛馬の骨片も出土している。

### 8 木簡の釈文・内容

(1) 「×兜□□□十羅刹女鬼子母神

(265)×40×2 051

井戸 SE一〇から出土。この木簡は呪符木簡の性格を有する。出土状況からみて井戸が壊される時に差し込まれたのではなく、作る際に差し込まれたと考えた方がよい。

(2) 「井 小□月十日之□□」

294×129×12 011

井戸 SE二二から出土。「月」の上の判読困難な一字は画数と字形からみて「二」か「三」または「五」であろう。

### 9 関係文献

浜松市教育委員会『山の神遺跡発掘調査報告書』(一九八九年)

(森田香司)

## 木簡研究 第一〇号

原秀三郎

卷頭言——木簡学会の十年——

一九八七年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 興福寺勅使坊門跡下層 藤原宮跡 藤原京跡  
藤原京左京九条三坊 紀寺跡 長岡宮跡 長岡宮・京跡  
跡 千代川遺跡 矢谷遺跡 大坂城跡(1) 大坂城跡(2) 梶原南遺跡  
宅原遺跡(豊浦地区) 長田神社境内遺跡 書写坂本城跡 砂入遺跡  
跡 杉垣内遺跡 清洲城下町遺跡 岩倉城遺跡 勝川遺跡 莢安賀  
遺跡 山中遺跡 小町一丁目一〇七番地点遺跡 宮町遺跡 川田川  
原田遺跡 光相寺遺跡 妙楽寺遺跡 釜瀬遺跡 南古館遺跡 大橋  
遺跡 手取清水遺跡 角谷遺跡 横江莊遺跡 白坏遺跡 草戸千軒  
町遺跡 延行条里遺跡 長門国分寺跡 安養寺遺跡 金光寺跡推定  
地 博多遺跡群(築港線関係第三次調査) 吉野ヶ里遺跡群 本告  
牟田遺跡

一九七七年以前出土の木簡 (一〇)

平城宮跡(第四四次)

中世木簡の一形態——山札・茅札についての覚書——

雲夢睡虎地秦墓竹簡「日書」より見た法と習俗

木簡の保存処理

『木簡研究』六〇号総目次

研究集会報告一覧

木簡出土遺跡報告書等目録

木簡出土遺跡一覧

頒価 三八〇〇円

四〇〇円

寺崎保広  
寺崎保広